



Title	話し言葉における「が」「けど」類の用法
Author(s)	三枝, 令子
Citation	一橋大学留学生センター紀要, 10: 11-27
Issue Date	2007-07
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/14360
Right	

話し言葉における「が」「けど」類の用法

三枝 令子

要旨

本稿では、話し言葉における、いわゆる「逆接」と呼ばれる接続助詞の意味と用法を観察した。もっとも使用頻度の高い「けど」は、発話末で使われることも多く、モーダルな性格を示す。「が」は、普通体とはともに用いないという文体上の制約があり、話し言葉においては「逆接」の接続助詞の典型とは言いがたい。また、「けども」は男性専用、「けれど」は女性専用の助詞となっている。これら一連の助詞は、発話内の異なる位置に現れ、異なる機能を示すが、基本的には、「けど」節の内容とは異なる面があることを示し、そして、それは後ろに続くという「後続節焦点化」の機能を持つ。その働きを利用して、発話末では、話し手は断定を避け、また、相手との会話を続ける意思表示として「けど」類を用いる。

キーワード：が、けど、けれども、けれど、けども

1 はじめに

話し言葉においては、接続助詞の「が」「けど」類が、いわゆる逆接とは異なるふるまいをすることが多い。たとえば、次の例文の下線部は、いずれもいわゆる「逆接」には当たらない。

- (1) 「つかぬことを訊きますが、ついさっき、東京の人がこちらに見えませんでしたか？
坂の途中で、たしか東京ナンバーの車とすれ違ったのですが」
「ああ、見えましたよ。東京の板橋区の人でしたが・・・」(遺骨)

小出(1984)は、文頭に現れる接続助詞「が」の機能を、また、白川(1996)内田(2001)は、文末に現れる「が」「けど」類を分析している。小出、内田における機能分類は、様々な用法に目配りした精緻なものである。それを踏まえた上で、さらに次のような課題が残されていると考える。

- 1) 話し言葉における「が」「けど」類の分析といっても、シナリオ等における用例が中心で、実際の発話データを扱っていない。そのため、「が」「けど」「けども」「けれども」「けれど」の違いは捨象されることが多く、相互の違いが明らかでない。
- 2) 言い始めと言い終わりの「が」「けど」類の用法を分けて論じているものが多く、接続助詞の基本的な用法とのつながりが見えにくい。

そこで、本稿では、以下の二点に焦点を当てて考えてみたい。

1. 話し言葉のデータを分析することによって、「が」「けど」類それぞれの現れ方の実際を検討し、相互に違いがあるか否かを確認する。
2. 話し言葉特有の「が」「けど」類の用法を、基本的な用法と関連づけながら考える。

2 話し言葉におけるデータの分析

話し言葉のデータとして、現代日本語研究会『女性のことば・職場編』(1987)と『男性のことば・職場編』(2002)を用いた。発話データ数は、『女性編』が 11,421、『男性編』が 11,099 で、合計 22,620 である。なお、3 節で用法を考えるにあたっては、作例や小説等の会話例も使用した。

2.1 全体の使用頻度

表 1 に、今回の話し言葉データにおける「が」「けど」「けども」「けれども」「けれど」の使用頻度を示す。なお、明らかに接続詞の働きをしているデータは除いた。

表 1 全体の使用頻度

	が	けど	けども	けれども	けれど	合計
頻度(%)	207 (13.8%)	974 (65.0%)	168 (11.2%)	113 (7.5%)	37 (2.5%)	1,499

表 1 から、これらの助詞の中では、「けど」が圧倒的に多く使われていることがわかる。そのほかの助詞の使用は、一番多い「が」でも 14%に過ぎず、「けれど」は 2%強に過ぎない。金澤 (2005) は、明治中期から昭和末期における話し言葉的な資料を 5 期に分けて調査し、昭和末期 (具体的には 1987 年の言語データ) に、それ以前に一位の出現頻度を占めていた「が」が「けれど」類に取って代わられる逆転現象のあることを示した。今回のデータもそのことを示している。

2.2 発話内の位置による使用頻度

次に、これらの助詞類が、一発話内のどの位置に現れるかを見る。表 2 の発話中とは、助詞の後に句点等がおかれて文が続く場合、発話末とは、一発話の終わりにこれらの助詞が使われている場合をさす。終助詞が付加する場合は、発話末として数えた。

表 2 発話内の位置による使用頻度

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
発話中	142 (69%)	469 (48%)	119 (71%)	70 (62%)	20 (54%)	822 (55%)
発話末	65 (31%)	505 (52%)	49 (29%)	43 (38%)	17 (46%)	681 (45%)
(内数 談話末)	26	314	25	14	8	387
計	207 (100%)	974 (100%)	168 (100%)	113 (100%)	37 (100%)	1,499 (100%)

表2の右端の合計欄から、まず、これら助詞類は全体として発話末より発話中でより多く使われていることがわかる。接続助詞本来の機能からすれば当然と言える。助詞の種類をみても、「が」「けれど」「けれども」「けれど」は、いずれも文中での使用が文末での使用を上回っているが、「けど」だけは発話末の使用の方が多い。表中の（ ）内のパーセントは、助詞それぞれの使用頻度における発話中、発話末の使用割合を示している。このことから、「けど」が接続助詞本来の用法とは異なる使い方をされていることがわかる。

今回用いた話し言葉データにおいて、一発話とは次のように定義されている。

(1) 意味のまとまりがある (2) ポーズがある (3) 他者のさえぎりが無い

しかし、ポーズがあっても、発話としては続いていると考えられる場合もある。そこで、他者からのさえぎりによって途切れるまでを「談話末」として別に数えた。ただ、発話者の意図は文字化した資料からは十分わからず、また、相手が「うん」「はい」とあいづちを入れた場合には談話は区切られる。さらに、会話が電話による場合には、他者が発話をさえぎっているかどうか明らかではなく、おおよその数に過ぎない。談話末の使用頻度数は、発話末よりは少ないものの、しかしなお、談話末においてもこれらの助詞を使うことが少なくないことがわかる。

2.3 男女別の使用頻度

下の表3から、助詞の使い方には男女差のあることが見て取れる。表中の（ ）内のパーセントは、男女それぞれの合計を100とした場合の格助詞の使用率である。「が」「けど」「けれども」は、男女がほぼ同じように使用しているが、「けども」はもっぱら男性が、「けれど」はもっぱら女性が使用している。

表3 男女別使用頻度

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
男性	102 (13%)	474 (62%)	126 (17%)	50 (7%)	11 (1%)	763 (100%)
女性	105 (14%)	491 (68%)	42 (6%)	63 (9%)	25 (3%)	726 (100%)
性別不明	0	9	0	0	1	10
計	207 (13.8%)	974 (65.0%)	168 (11.2%)	113 (7.5%)	37 (2.5%)	1,499 (100%)

この男女差は、発話内での使用位置にも現れているだろうか。次の表4をみると、全体の使用数でも男性より女性の方が助詞を発話末に使うことが多く、また、女性が「けど」を発話末で使うことが多いことがわかる。

表 4 男女、位置別使用頻度

		が	けど	けども	けれども	けれど	計
発話中	男性	71 (16%)	244 (55%)	89 (20%)	36 (8%)	7 (2%)	447
	女性	71 (19%)	220 (60%)	30 (8%)	34 (9%)	13 (4%)	368
発話末	男性	31 (10%)	229 (73%)	37 (12%)	14 (4%)	4 (1%)	315
	女性	34 (9%)	272 (76%)	12 (3%)	29 (8%)	12 (3%)	359
計		207	965	168	113	36	1489

これらの助詞を一発話内に複数使うこともある。その男女別の頻度を表 5 に示した。表 5 から、男性は、「ちょっと細かいんですが一、いちお一、10 月はつかの日付で、[名字]さんのほうにいただいているんですけど一、」のように、一発話内で異なる接続詞を使用し、かつその組み合わせも多様なことが見て取れる。全体に、男性の方が使い方が多様でかつ頻度も多く、女性は、男性にくらべると頻度が幾分少なく、使い方も限られている。

表 5 一発話における複数使用数

	男性	女性
同じ助詞	44	29
異なる助詞	18	8
合計	62	37
助詞の組み合わせ数	9	4

2.4 「が」「けど」類の前の述語

2.4.1 「普通体」「です・ます体」の選択

過去に行われた接続助詞研究の中で、「が」と「けど」類の違いに正面から取り組んだものに三尾砂 (1942) がある。三尾は、戯曲を話し言葉のデータとして用いて、書き言葉における接続助詞の使い方との違いを見た。文の終止部の用言が「です・ます」体である時、文の内部の用言はどのように変化するか、それが接続助詞によってどう違うかをみたのが、いわゆる「丁寧化百分率」である。これらの助詞が「です体」に付いた場合の百分率は、以下の表 6 のようであった。

表 6 三尾砂によるデータ

書き言葉	小学国語読本	が	98%
話し言葉	戯曲	が	94.5%
		けれど類	86%

分析の結果から、三尾は、「が」は最もふつうに「です体」形の用言を支配すること、「が」が「です体」であるということ、「丁寧さをさほど持たない」こと、「それだけに、また、「だ体」形へついた場合、それは、同輩以下に多く用いられるぞんざいな表現にな」ることを指摘している。

今回使用した実際の話し言葉データでは、三尾が用いた戯曲の台本とは異なり、終止部の用言というのが定めにくい。そこで、助詞類が接続する語の述部のスタイルを「です・ます体」「普通体」に分けて調べた。表7の下段の合計¹をみると、「が」では「です・ます体」が、「けど」では「普通体」が多く使われ、「けど」の「です・ます体」接続率は、全体で39%と、三尾のデータ86%よりさらに「です・ます体」に接続することが少なく、逆に「普通体」には61%の割合で接続している。ちなみに発話中のデータ数だけを見ると、「普通体」への接続率は63%であった。表中、「が」に「普通体」が接続している例が4例あるが、これはすべて「賭に燃えるが、金は残らない」という星占いの結果を引用した間接話法の例である。また、普通体に「けど」が接続する傾向は、男性より女性に多い。普通体の持つ丁寧さの度合いの低さを「けど」によって緩和していると考えられる。

表7 文体別頻度

		が		けど		けども		けれども		けれど	
男性	です・ます体	102	100%	195	41%	82	67%	38	78%	7	64%
	普通体	0	0%	281	59%	41	33%	11	22%	4	36%
女性	です・ます体	99	96%	176	37%	20	51%	59	92%	16	64%
	普通体	4	4%	303	63%	19	49%	5	8%	9	36%
性別不明	です・ます体	0		1	11%	0		0		1	100%
	普通体	0		8	89%	0		0		0	0%
合計	です・ます体	201	98%	372	39%	102	63%	97	86%	24	65%
	普通体	4	2%	592	61%	60	37%	16	14%	13	35%

「が」が、普通体では用いにくいという現象には、これらの助詞の通時的変化にも原因が求められるだろう。「けど」類は、もともと条件を表すものであったのに対して、「が」は、格助詞の「が」を出自とする。そのため、「が」は前後を切り離す働きが強い、というよりも、そうしたものが接続助詞として独立したと考えられる。今回のデータ中、次の例の下線の「が」は「格助詞」なのか「接続助詞」なのか判然としないという点で、その出自を示しているとも言える。

¹ 表7の合計数は、表1～表3と異なる。これは、助詞の前の述語が聞き取り不可能な例があるためである。

- (2) [宗教団体名] もねー、ほんとは行くはずだったんだけど、中国にねー、ただ、[宗教団体名] は[社名] をね、経由して行くはずだったのが [社名] がこけたからさー。(男 2660)

「が」は、前後の切り離し機能が強いために、それと普通体が結びつくとぞんざいな響きを持つと考えられる。「昨日病院へ行ったが／んだが」という表現は、女性には今日でも非常に使いにくいと思われる。

鈴木(1997)、三牧(2001)は、社会言語学的観点から普通体と丁寧体のスタイルシフトの問題を分析している。鈴木、三牧の結論はおおむね共通する。鈴木は、丁寧体の世界の中で「文末が普通体になっているのは、<話し手の領域><中立の領域>について述べている部分に限られ」、「聞き手を目当てとした発話はすべて丁寧体を維持」していることを実例を元に論じた。今回のデータでも、そうした傾向がうかがえる。

- (3) ま、それまでは払うけどー、それ以降は払わないとか、なんか勝手に決めてやってるのかもしれないんですけどー。(男 1125)
- (4) いや、わかんない、なんだかよくわかんないけど、高師、いちお文理大だとゆうふうにゆってましたけどー、本人は。(男 5079 女性発話)

(3)は、並列節の中で普通体が用いられ、(4)では話し手の独話的部分で普通体が使われている。すなわち、こうしたスタイルの選択には、三尾が指摘した接続助詞自体の違いに加えて、さらに、鈴木の言う丁寧化世界の規範というものも作用していると考えられる。ただし、話し手はそういう制約、規範に従うだけでなく、その条件からあえてはずれることで、自分の意図を表現するという能動的な面もある。次の例は、基本的には「です・ます体」が使われているが、下線部において突然丁寧度をあげることで、内容を冗談のように響かせる効果をもたらしている。

- (5) 女：うーん。
男：てゆうか、もうほとんど住んでるような感じで。
女：あ、一緒にー↑
男：毎日通ってきてたりするわけですよー。
女：★²そうゆう

² データ中の記号で、↑は上昇イントネーション、★は、発話の途中で次の発話が始まった時点、→ ←は、前の発話への重なり始まりと終わり、{ }は、聞き手のあいづちを表す。例(11)、(20)の記号も同様である。

男：→住んじやいないすけど。←

女：そうゆう経験はございませんけどー<笑い>。(男性 5045)

男：通い、通い婚のような {うーん (女)} 感じでー。

2.4.2 形容詞と接続のスタイル

三尾は、話し言葉の分析において、形容詞のスタイルについてもふれ、「が」はイ形容詞に付く場合にはことにその使用が避けられること、一方で「小さいですが」といったイ形容詞の「です」体も落ち着かないものがあり、結局、話し言葉では、イ形容詞の原形と、それに直接付いても失礼な感じを与えない「が」以外の助詞の結びつきが多いと述べている。今回の資料でその点を見たのが表 8 である。なお、表中の形容詞は、肯定形に限定し、また、「たい」は省き、「わかりやすい」等の「やすい・にくい」は含めた。また、「いい」の使用頻度が高いので、「いい」と「その他」の形容詞に分けた。

表 8 助詞が接続する形容詞の文体

		が	けど	けども	けれども	けれど
形容詞	いい		21	1		1
	その他		16			
形容詞+んだ	いい		28	2		2
	その他		13	2		
形容詞+です	いい		2			
	その他		4			
形容詞+んです	いい	2	13	2	3	2
	その他		6	1	2	
計		2	103	8	5	5

今回の資料でも、「が」が形容詞に直接付く例はなかった。また、イ形容詞に付く助詞は、そのほとんどが「けど」であること、「けど」との結びつきにおいては、「小さいですけど」といった結び付きは相変わらず少なく、その代わりに、イ形容詞に直接付くか、もしくは、「イ形容詞+んだけど」の結びつきが多いことがわかる。これは、先の表 7 にも見られることだが、形容詞もしくは普通体の直截さを「けど」によって和らげているためと考えられる。

2.5 「のだ」

「けど」類の前の述語に「んだ/んです」が入る場合と入らない場合とがある。この違いが、そもそも「のだ」に求められるものか、あるいは、「けど」がその選択に作用してい

る部分があるのかは明らかでない。「けど」の前が名詞の場合には、もともと「のだ」自体に名詞機能が含まれているので、次の例(6)(7)にみるように、大きな違いは見いだしがたい。

- (6) あのー、じゃ 1 番のあのー、じこーぐか (治工具課) の、おー行動点検のほうですけどもー、えー、まあ非常に困われた部屋の中での作業とゆうことでー、えー、ま、作業に慣れがあんのかなーとも思ったんですけどもー、(略) (男性 3684)
- (7) えーとですねー、1 番の行動点検なんですけどもー、あのー、えー、非常停止をしてー、えー機械を止めましてー、えーハンドルーそうさー (操作) にしてー、えー、タップとですね、スピンドルの、あの、切り離しをやりましたけどもー、(略) (男性 3709)

もちろん、次のように「スコープの「のだ」」の場合には、「のだ」が必要だが、これは「けど」の有無とは関係がない。

- (8) こわかったのが、提案なんですけど。(女性 7207)

「のだが」「んだけど」の問題を正面から論じているものに、野田 (1995、1997)、李・吉田 (2002) がある。それぞれ、幅広く用例を観察し、いくつかの知見が得られているが、今後検討すべき問題もある。野田 (1997) は、「「のだが」を用いたほうが、従属節の内容から予想される順当な事態が生じなかったことに対する意外性や不満が多少強く示されるようである。」と述べている。たしかに、書き言葉の場合にはそういう傾向が認められるが、話し言葉では「のだが」が強い不満を表すというのは、「が」と「普通体」の結びつきが行われないため、スタイル上の制約が大きい。また、李・吉田 (2002) は、発話末で用いられる「けど」について、「「んだ」をそのまま発話末に残すことを避けることで、断定のムードによってもたらされる感情や気持ちが前面に出るのを弱める」と述べている。「思ったんだけど。」と「思ったんだ。」をくらべればたしかにその通りだが、「思ったけど。」とくらべた場合はどうなのだろうか。

- (9) これも入ってると思いますけどー、これはあのー、3 月ふつか (2 日) に、あのー、いちお、うちの中の一、えーと、えーとあすこに揭示されてると思うんだけど、まー、そのあたりこころへんの話はしますがー、えーと 3 月ついたり (1 日) かなのか (7 日) のあいだありますんでー、えーとこの場を借りてー、話しておきます。(男性 3611)

例(9)の「と思いますけど」と「と思うんだけど」の違いは、文体以外にどこにあるのだろうか。多くの場合、「が」「けど」類の前の「のだ」は言わないことも可能である。今村(2007)は、「のだ」の選択を「語りかけ度」によって説明しているが、たしかに、話し手は自分の発話意図に応じて「のだ」を使用するか否か決めている面が大きいと思われる。この問題については、今後の検討課題としたい。

2.6 述語の種類

先に、助詞類の前に来る述語のスタイルの違いを見たが、ここでは述語の種類をみてみる。「けど」類の前に来る述語の中で頻出頻度の高い4語を、表9に示した。この4語で全体の使用数の30%近くを占める。いずれも話者の断定を表す表現ではない点が共通する。

表9 使用頻度の高い述語

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
と思う	34	120	20	11	1	186
ある・いる	12	55	17	10	0	94
いい	2	65	5	5	5	82
と言う	12	44	6	4	0	66
計	60	284	48	30	6	428

助詞に接続する述語の中では、動詞がもっとも多いが、その動詞の中でも、いわゆる思考動詞が三分の一を占め、特に「と思う」が多かった。

(10) 男：まだ若いから、ねー↑、こういうの使う必要ないと思うけどー。

女：それでもなんかー、禿げてきたんですけど。<間 7秒> (男性 6917)

(11) A：きょう、雨降るのかな。

B：いやー、きょう降らないと思いますけど<笑い>。(男性 6012)

(12) 男：でー、ちょっとま、あんまりちょっと目立つこともできないんでー、あの一、こちらも極力折れるところは折れようと思ってん★ですけどー。

女：→あー、わかりました。← (男性 1295)

森山(1992)は、「と思う」の基本的意味を「個人情報の表示」ととらえ、さらに、前に来る情報を、その情報の種類によって、不確実なものとして表示する場合と個人的な意見として表示する場合とに分けた。「と思う」が聞き手にも共有させるべき情報に共起した場合、個人的な情報として提示することは、不確実であるということを示し、情報内

容が「情報として共有されていくことを目指さない場合、「と思う」はそれが個人的・主観的なものであることを明らかにする」という。上の例では(10)(11)が不確定、(12)が個人的な意見を表す「と思う」に当たるだろう。発話中では、統語的に「けど」がなければ節はつながらないが、発話末では必ずしも必要ではない。しかし、この「けど」がなければ、話し手は発話内容を断定的に言いきることになる。そうはしたくないという時に、基本的に接続助詞で後へ続く「けど」を用いることで、言い切りの回避が行われていると考えられる。「けど」の持つモダリティ性が強く感じられる。

3 番目に多く用いられている述語は、「のはいい」「てもいい」「ば／たら／といい」等の、条件とともに使われる「いい」類である。「見た目は悪いけど、味はいい。」といった「いい」は含めない。

(13) だから、ねー、なんか、ほらく間>趣味がある人とかだったら、ま、そういうもん買ってくればいいけどおー。(女性 456)

(14) ぼろいん、ほら、ぼろくて安いんなら全然いんだけどー。(女性 633)

山田 (2005) は、こうした用法の「いい」は、基本的に「ある事態を受け入れることができる」ということを示すと述べている。「と思う」と同じく、断定的な判断を避けるために使われており、モダリティ表現的な働きをしている。また、この「いいけど」は、「と思うけど」以上に、「けど」との結びつきが強い。

「けど」節に現れる述語で、2 番目に頻度の高い語は「ある・いる」、4 番目に高い語は「言う」類であった。「ある・いる」には、「ことがある」を含め、「動詞+てはいる」は含めない。また、「言う」は、「と申す」「と言われた」等を含む。

(15) ことさら悪いところを<笑いながら>どうしようといった感じも、確かにあるけどな。(女性 6337 : 男性発話)

(16) あんまりおいしくないとはゆったんですけど、初物 (はつもん) だってゆったから柿を持ってきました。<笑い> (女性 3348)

これらは、客観的な事態を表す述語で、話し手の判断を示さない。このことから、「けど」類が事態をありのままに提示する節、もしくは、話し手の主観を控え目に述べる節で多用されていることがわかる。

「けど」が、どのようなモダリティ表現に接続するかをみたのが、次の表 10 である。「形式名詞+だ」は、表にあげたほかに、「ものだ、ようだ、ところだ」が各 2 例、「ただ、そうだ」が各 1 例あったが、「べきだ」はなかった。

表 10 共起するモダリティ表現

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
たい／てほしい	6	18	1	3	0	28
かもしれない	3	19	1	2	2	27
らしい	0	10	0	1	1	12
だろう／でしょう	0	7	3	0	0	10
わけだ・わけじゃない	1	5	2	1	1	10
てはいけない	0	6	0	0	1	7
ことだ	1	2	1	1	1	6
はずだ	0	2	0	1	0	3
みたいだ	0	3	0	0	0	3
ねばいけない	1	0	0	0	0	1

「けど」類の前に来るモダリティ表現には、推量、希望等を表すものが多い。逆に「べきだ」「なければならない」等の当為のモダリティ表現は現れず、「けど」が強い断定を表す表現とは共起しないことがここからもわかる。

2.7 終助詞との共起

表 11 に終助詞との共起を示した。助詞に終助詞が付加される場合はあわせて 184 例だったが、その大半は「ね」で、次が「さ」であった。これは、相手に共感を求める「ね」「さ」の意味から納得できる。興味深いのは、「ね」と並んで、会話で頻度の高い「よ」が一つも現れない点である。表現としては、「だけどよ」は可能である。しかし、もし用いれば「よ」がもともと持つ相手に自分の考えを押しつける意味がさらに増幅されて非常にぞんざいに響くため、普通の会話では避けられると考えられる。

表 11 共起する終助詞

	男性	女性	計
ね／ねえ	62	69	131
さ／さあ／っさ	25	17	42
な／なあ	9	2	11
計	96	88	184

2.8 2 節のまとめ

以上、今回の話し言葉データの分析からわかったことをまとめると、次のようになる。

- 1) 総数約 1,500 のうち、「けど」の使用が 65% を占め、圧倒的に多い。それに続く「が」でも 14% に過ぎない。
- 2) 接続助詞というものの、「けど」は、発話末、談話末でもよく用いられる。
- 3) 「が」「けど」「けれども」は男女の使用頻度に大きな差が見られないが、「けども」はもっぱら男性が用い、「けれども」はもっぱら女性が用いる。
- 4) 「が」「けれども」「けれど」「けども」は「です・ます体」に接続することが多いが、「けど」は普通体で用いることのほうが多い。この「けど」類が普通体に接続する傾向は、三尾 (1942) の調査時点より、一層強まっている。
- 5) これらの助詞とともに用いられる述語には、「と思う」「条件+いい」といった話し手の判断を控え目に述べる表現、「ある・いる」「と言う」といった客観的な叙述表現が特に多い。
- 6) 「けど」は、発話中よりも発話末で用いられることが多く、また、「です・ます体」よりも「普通体」に接続することが多い。さらに、「と思うけど」の使用が多いといった点から、「けど」は、普通体の直截さを和らげ、発話の丁寧度を高める働きをしていると言える。

これら一連の接続助詞を「けど」で代表させることはそれほど問題がないが、「が」は、使われる文体に制約があるので、その点を考慮する必要がある。

3 「が」「けど」類の用法

3.1 「けど」節類の基本的意味

2 節で得られたデータを参考にしながら、「けど」類の持つ基本的な意味を考えてみる。

「けど」類は、発話中に用いられることが多く、基本的には接続助詞の機能は失っていない。接続詞、接続助詞の「しかし」「が」「けど」等は、従来「逆接」に含まれることが多いが、多くの先行研究が単なる逆接ではないことを指摘している。たとえば、佐竹 (1986) は、「シカシ・ガ・ケレドモ類の接続詞は、「実際は逆接にはおさまらずもっと広い範囲で使われている」として、「前後件を直接あるいは間接に否定的に関係づけるものとして」見ている。佐竹は、この否定的関係を次の 4 類に分けている。すなわち、対比関係 (否定的に関係づけられる並列関係)・否定的継起関係 (否定的に関係づけられる継起関係)・否定的累加関係 (否定的に関係づけられる累加関係)・逆接関係 (順接関係の成立が否定されるもの) の四つで、この否定的累加関係では、前件の内容に関する別の側面や否定的な解説を付け加えるときに成立するとしている。この否定的累加関係の意味を、「しかし」の基本的意味とするものに浜田 (1995) がある。

浜田は、「しかし」を「ところが」とくらべ、「しかし」の基本的な意味として「あるこ

とがらに p という側面が存在すると同時に、それと異なるカテゴリーに属する q という面が存在するというを示し、結果的に「q に注目せよ」ということを表示する」としている。特に注目したいのが、この「結果的に「q に注目せよ」ということを表示する」という点である。接続助詞が接続詞と異なる点は、接続詞の前後が文で、独立性が高いのに対して、接続助詞は文内の節に接続し、かつ、接続助詞は従の節におかれるため、「けど」節は、後続する主節に注目せよという働きを必然的に持つ。林（1996）は、この働きをアンケート調査の提示文における日本語の問題という観点から明らかにしている。

林の調査では、「自分が使われるとしたらどちらの課長がよいか」という質問に対する回答として、次の二組の文を用意した。

- 1) 1 規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことで
は人のめんどろをみません
- 2 時には、規則をまげて無理な仕事をさせることはありますが、仕事のこと以外でも
人のめんどろをよくみます
- 2) 3 仕事以外のことでは人のめんどろはみませんが、規則をまげてまで、無理な仕事を
させることはありません
- 4 仕事以外のことでは人のめんどろをよくみますが、時に規則までまげて無理な仕
事をさせることがあります

1)の提示文では、約 85%対 10%強の割合で、「めんどろをみる課長」を示す 2 が選ばれた。ところが質問文の前後を入れ替えた 2)の提示文では、3 と 4 の課長がそれぞれ約 5 割弱で選ばれた。すなわち、「が」節には、話し手の主張は強く示されず、「が」節自体は、後続節に注目せよというサインとなっている。

本稿では、「が」「けど」類の基本的な意味を「異なる側面があることを示すこと」かつ「後続節焦点化」と考える。

3.2 「けど」節類の機能

「けど」節類の機能は、大きく次の四つに分けられる。

1. 「発話の切り出し」
2. 「対比」
3. 「言い切りの回避」
4. 「注釈」

「が」「けど」類の基本的な意味である「異なる側面があることを示すこと」かつ「後続節焦点化」は、発話内の現れる位置や文脈によってどちらかの意味合いが強まったり弱まったりする。以下、順にみていきたい。

1. 「発話の切り出し」

発話の言いはじめに現れる「けど」類は、ある話題を持ち出すにあたり、談話の主題をまず示すことによって、次に続く主要な話題を述べる導入となっている。「については」といった意味で話題を導入するので、名詞述語がよく用いられる。

(17) えーと一、CK 点検、2 番なんですが一、(男性 3771)

(18) 次は一、[名字] 先生ですけど。(女性 1401)

また、次のようなメタ表現もよく用いられる。

名詞述語の例

小さいことけど、たとえばですけど、ぶちあげた話なんですけど、提案なんですけど、変な言い方けど、ちょっと早い話なんですけど、さっきの続きけど、変な話けど、別件なんですけど、お願いなんですけど、

形容詞の例

しつこいけど、悪いけど、ちょっと細かいけど、すいませんけどでも

動詞の例

前お話ししたんですけど、前にお話をしましたが、お聞き苦しいと思いますけど
話戻るけど、話はがらっと変わるけど

ここであげた機能を「前置き」とする先行研究も多い。たとえば、野田 (1995)、李・吉田 (2002)。しかし、「前置き」という用語は、主節を文の中心に据えた場合の、その前におくものというとらえ方になる。実際には、発話の切り出しの「けど節」類は、会話の始まりが唐突になるのを避けるため、それなしには発話がはじめられないという積極的な機能を果たしていることが多い。そこで、本稿では「切り出し」という用語を用いる。

2. 「対比」

統語的には、取り立ての「は」「も」が用いられること、「昔ー今、大きいー小さい」といった対照的な叙述が表現されることなどがあげられる。いわゆる「逆接」にもっとも近い用法だが、対比的な語句があるために対比と受け取られるので、これが「けど」類の基本的な意味とは考えない。

(19) トカゲはだめけど、蛇平気なんですよ、ぼくは。(男性 5327)

3. 「言い切りの回避」

発話において、後続節の来ることが期待されない場合もある。そうした場合は、「と思

うけど」に代表されるように「けど」類は、話し手の主張を弱める働きをする。これは、「けど」類が、もともと別の面があることを示すために、相対的に「けど」節の叙述内容を弱めるためにおこる。そして、「けど」類が言い切りで用いられる場合には、さらに、「けど」のもう一つの基本的な意味である「後続節焦点化」が大きな意味を持つ場合もある。すなわち、話し手はまだ発話が続くことを意識している、というサインとして「けど」類を用いる。

(20) A : →そうですね、よく←、はい、はい。

B : それから、あと [名字] さん、(わかる Inf (女)) は、(ええ、ええ Inf (女))
[名字] 先生に★おたずねしたってゆうように聞きましたけど。

A : →そうです、←とてもいい、かたですけど。(女性 1628)

(20) の例で、発話者Aは、人を推薦しており、下線の「けど」は、文脈から対比を意味していないことは明らかである。人を推薦する場合には「とてもいいかたですよ」や「とてもいいかたです」という表現も自然だが、「けど」を用いるのはなぜなのか。話し手は、自身の主張を弱めると同時に、この文脈では、相手に「あなたはどうか判断するでしょう？」と会話が続くサインを示していると考えられる。次の例も、そうした側面が強い。

(21) 「田口さんというのは、ご主人の同僚であることは間違いないのですね？」

「ええ、同僚っていうか、主人の部下でしたけど」(遺骨)

(22) 「お宅のお寺はどちらですか？」

「山口県です。日本海に面した長門市というところですけど」(遺骨)

(21)(22)の例でも「けど」がなくても文は成り立つが、話し手は、相手の質問に答えつつ、質問の意図がその質問のほかにあると察していることを「けど」によって示している。

このように「言い切りの回避」に当たる用法では、「けど」類の基本的な意味である「異なる側面があることを示すこと」かつ「後続節焦点化」が、話し手の主張を弱めるため、また、次に会話が続くことを話し手が意識しているサインとして働いている。

4. 注釈

その他、上記 1~3 の中間的な用法として「注釈」がある。話は切り出されているが、主要なテーマを補いたいと思った時、逆に、主題は既に発話されているが、それに付随情報をつけたいと思った時、明確な論理的意味を持たない「けど」類は、使いやすい便利な表現と言える。

- (23) <果物屋の店先>パイナップル食べない? いま入ったばっかなんだけど (池袋)
- (24) 「先ほど、特設スタジオの電話にかけていただいたときには、あなたは、自分はこの事件の犯人だ、話したいことがあるから電話したとおっしゃったそうですが?」
「そうそう、そう言いました。なかなか信じてもらえなかったけど」(模倣)

(23)の例は、「切り出し」としても使えるが、ここでは話し手が主節を前に出したため、「けど」節はうしろにまわり、注釈の機能を持つことになった。(24)の例は、「言い切りの回避」でもなく、前の節と順序を入れ替えることも出来ない点から、注釈的に付加したと考えられる。

4 まとめ

本稿では、まず、2節において「けど」類の用法を実際の話し言葉データにあたって調べた。話し言葉においては、いわゆる「逆接」の接続助詞とされる「が」の使用は少なく、「けど」が多く用いられる。これは、「けど」が普通体の直截さを和らげ、また、話し手の断定を弱める働きを持つためである。データからは、「けど」節が、モダリティ表現の構成要素となっていることがうかがえる。これは、1. 「けど」節が発話末、談話末でも使われることが多いこと、2. 男性専用、女性専用の接続助詞があり、また、同じ接続助詞でも男女の使用頻度に差が見られること、3. 「と思うけど」「条件+いいけど」といった固定化した、話し手の主張を弱める表現が多いこと、による。「けど」類の基本的性格は、節と節を結びつけるところにある。もとより、接続助詞はすべてそうした働きを持つものだが、「けど」類は、ほかの接続助詞にくらべて、節の結びつきに論理性が弱い。そのため、逆に、後につなぐという働きが前面に出てきていると考えられる。3節で述べた、これら助詞類の、切り出し、対比、言い切りの回避、注釈、の用法には、いずれも主要な部分が後ろに続くという発話意図がある。話し言葉では、こうした「けど」の機能を利用して、話し手は断定を避け、また、相手に会話を続ける意思表示をしていると言える。

本稿では十分に検討できなかった「のだ」と「けど」の関わり、書き言葉と話し言葉におけるこれらの助詞のふるまいの違い、外国語における対応表現の検討などを今後の課題としたい。

参考文献

- 今村和宏(2007)「『のだ』の発話態度の本質を探る－「語りかけ度」と「語りかけタイプ」－」
『一橋大学留学生センター紀要』10(印刷中)
- 内田安伊子「『けど』で終わる文についての一考察－談話機能の視点から－」『日本語教育』109
- 金澤裕之(2002)「近代語－話しことばにおける文の内部の丁寧さ」『国文学』5月号

- 小出慶一（1984）「接続助詞「ガ」の機能について」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』7
- 此島正年（1973）『国語助詞の研究』桜楓社
- 佐竹久仁子（1985）「「逆接」の接続詞の意味と用法」『論集 日本語研究（①）現代編』宮地裕編 明治書院
- 白川博之（1996）「「けど」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6
- 鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』田窪行則編 くろしお出版
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 野田春美（1995）「ガとノダガー前置きの表現」『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版
- 浜田麻里（1995）「トコロガとシカシ 逆接接続語と談話の類型」『世界の日本語教育』5
- 林知己夫（1996）『日本らしさの構造』東洋経済新報社
- 三尾砂（1995）・解題 吉田東朔『話し言葉の文法（言葉遣篇）』くろしお出版（原著は1942年発刊）
- 三牧陽子（2001）「対話に於ける待遇レベル管理の実証的研究」平成9年度～平成12年度科学研究費補助金 基盤研究(C) (2)課題番号 09834005 研究成果報告書
- 森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐって一文の意味としての主観性・客観性一」『日本語学』Vol.11
- 山田進（2000）「「いい」の意味論一意味と文脈一」『日本語 意味と文法の風景一国広哲弥教授古稀記念論文集』ひつじ書房
- 李徳泳・吉田章子（2002）「会話における「んだ+けど」についての一考察」『世界の日本語教育』12

用例出典

- 遺骨：内田康夫（2007）『遺骨』文春文庫
- 池袋：宮藤官九郎（2005）『池袋ウエストゲートパーク』角川書店
- 模倣：宮部みゆき（2006）『模倣犯』新潮社
- 女性：現代日本語研究会（1987）『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 男性：現代日本語研究会（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房